

土岐の昔ばなし
第四話

榿の木と龍



TOKI-City
tourism association
土岐市観光協会

【土岐津町本郷の下街道】

龍がいたと云われている大きな榿の木は、土岐津町本郷上の名古屋と中山道をつぶす下街道の脇道にあったようです。現在はそのことを知る人も少なくなりましたが、街道沿いは趣きのある風情を残しています。



情緒の残る下街道の風景



Webサイトへ

土岐の昔ばなし 閲覧・印刷できます!

右のQRコードか下記URLからWebサイトにアクセスしてください。
<http://toki-kankou.jp/toki-old-story>

発行: 土岐市観光協会
事務局 〒509-5192
岐阜県土岐市土岐津町土岐口2101
(土岐市役所産業振興課内)
TEL 0572-54-1111 FAX 0572-54-0210
<http://toki-kankou.jp>

榿の木と龍

(再話・滝 節子)
(絵 … 佐渡山安正)

ずっと昔、土岐津の人々は、高台たかだいで水も少なく、やせた土地で、一日中せつせと田畑を耕してくらしをたてていました。

ある年、日照りが続き、稲は萎れ井戸水も出なくなっていました。村の人々は雨乞いあまごいをしました。雨は一滴も降りません。地面はひび割れ、稲や野菜は枯れはじめました。困った村人たちは、庄屋の家へおしかけますが、どうにもなりません。

ある星の輝く静かな夜のことでした。庄屋は眠れないので、外に出てみました。ふと人の気配にふり向くと見たことのない若者が立っていました。庄屋は、おそろおそろ

「こんな夜中に誰やな」と聞くと、若者は「わしは、ある人の使いで来た。その人は雨の降らせ方を知っていないさる」と答えました。

「やつ、それはありがたい。ぜひ教えてくれんかのう」と庄屋は頼みました。若者は

「ただし条件がある。お前のところに十六になる娘がおる。ちよつとの間、貸して欲しい」と言いました。庄屋は

「ゆきゆきは、大事な一人娘やが、しょうがない。じゃが、きつと雨を降らせてくださるかのう」と聞くと、若者は

「約束しよう。だがわしの入って行くあの木の穴を決してのぞくなよ」と大きな榿の木を指差しながら言いました。

庄屋が、家に帰り娘にわけを話すと、娘は「ええよ、この村のみんなが助かるんなら、私行きます」と言って、娘は、手をふりとほとほと若者の後からついて行きました。そして、榿の木の下で、ふっと見えなくなりました。

やがて、明け方になると雨が降りはじめました。川も井戸もみるみる水がいっぱいになり、

稲や野菜も生き返ってきましたが、何日たっても娘はもどってきません。庄屋はどうしても娘にいたくなくなって、とうとう榿の木の穴をのぞいてしまいました。

「ひゃあ！こつこれは」庄屋は思わず大声で叫びました。娘は一匹の大きな龍と一緒にいたのです。龍は

「みたな！約束を破ったからには、娘をかえすわけにはいかん」と言ったかと思うと、娘をつれたまま大きな火柱となって、雨雲の中に消えて行きました。庄屋は、ぼう然とその場に坐り込んでしまいました。すると真上の雲のあたりから

「お父様、悲しまないでください。私のかわりに大ぜいの人が救われたのです。龍王様は、とても優しくしてくれます。お祈りすれば、必ず雨を降らせてくださると、約束なさいました。私は、龍王様のおそばで、幸せにくらしていますよ」と鈴をふつたようなきれいなゆきの声がかしました。庄屋は

「ゆき。すまん。日照りで困ったときは頼むぞ」と空に向かって祈りました。

庄屋は、榿の木のあった所に社やしろを建てました。それから、日照りが続くと、人々はこの社を一生懸命祈るのです。すると必ず雨が降ったということです。

おしまい



このお話は、(社)土岐青年会議所発刊の『土岐の昔ばなし』から転載させていただきました。転載に際し、昔話研究会チームNOBUNAGAのご協力をいただきました。